

## 特集「未来社会に向けた研究開発」の発刊に寄せて

向 井 丞

2015年4月、日本ユニシスグループは新中期経営計画「Innovative Challenge Plan」をスタートさせた。あらゆるモノやヒトがつながるIoT（Internet of Things）の世界で、未来のあたりまえになっていく革新的なサービスを実現することをビジョンとしている。また、このビジョンに合わせ、新たなコーポレートステートメント「Foresight in sight」を策定した。このコーポレートステートメントは、2020年に向けた日本ユニシスグループの目指す姿を表現したものであり、「先見性」で業界の変化やお客様のニーズ、これからの社会課題を先んじて把握し、経験や常識にとらわれない「洞察力」によってお客様に最もふさわしいソリューションやサービスを提供していきたいという思いを込めている。

ここ数年で、各種センサーやカメラ、音声等のデータのデジタル化が急速に進んできていると共に、各種スマートデバイスも多様化し、かつ、急速な広がりを見せている。加えて、データ処理技術の高度化、無線通信の高速化/大容量化、クラウドに代表されるようなコンピューターリソース制約の大幅な緩和を背景に、今までコンピュータ処理対象ではなかった多様なデータの処理/活用が可能となった。それに伴い、それらのデータをビジネスに活用したい、あるいは、それによって社会問題を解決したいというニーズやアイデアが各事業部門の現場からも上がってきている。

そのようなニーズやアイデアを実現するには、それらのデータの入出力を担うデバイス群、そこから発生する多種多様で大量なデータを伝送するネットワーク層における技術や、いわゆるビッグデータ処理の領域でデータを分析し、かつ、機械学習で予知する技術が重要である。また、何より、新たな領域におけるコンピュータ処理を考えていこうとしているお客様と、将来のあるべき姿を検討しながら一緒に前へ進もうとする姿勢が重要だと考えており、更には、お客様の潜在ニーズをICTで刺激していけるように、最新のICT技術を提供し続けることが重要だと考えている。

日本ユニシスグループは、どちらかと言えばミッションクリティカル系のシステム構築技術のイメージが強いが、2006年にR&D拠点として総合技術研究所を組織化し、上記のようなニーズに先駆けて、さまざまな技術領域において将来実現するであろう未来像を描き、今、研究開発すべきテーマに取り組んでいる。直近では、JAXAのパイロットプロジェクトとなるエネルギーマネジメントシステムへの衛星データの活用事例がある。これは、IoTへの取り組み事例の一つでもあり、地球観測衛星センサーと地上センサーから採取した大量データを解析し、外部環境による再生可能エネルギーへの電力変動に対応した発電量を機械学習で予測するシステムである。このような実証実験を通し、お客様と共に、技術を更に高度化していきたいと考えている。

また2013年にはユニアデックスにおいて、未来予測および新技術検証やビジネス共創活動

を担う組織，未来サービス研究所を設立した。

本誌は，さまざまな研究の中から，中長期的な視点に立った先端技術，および社会課題の解決を目指した実践的な研究を紹介する。日本ユニシスグループにこのような研究や技術があるのかと，興味を持って頂けるならば幸いである。

(代表取締役常務執行役員)